

み感じました。

最後に、言い残したいことを三つ挙げておきます。ぜひ守って下さい。

- 1 これから戦争は絶対にしないで下さい。
 - 2 家庭では親を大切にして下さい。
 - 3 自分の仕事に精出してよく働いて下さい。
- 以上申上げて、私の労苦報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 渡辺 長治

一、出生から終戦まで

私は、大正九（一九二〇）年九月一日、霊峰富士の麓、山紫水明で名高い山中湖畔、山梨県南都留郡中野村山中で出生。村立山中高等小学校を卒業。昭和十七（一九四二）年一月十日、戦時召集兵として東京赤羽陸軍輜重兵第八六部隊に入隊。編成されて直ちに満州国間島省延吉の野戦貨物廠

第二六四三部隊（輜重兵隊）に転入となり城子溝方面の警備に当たる。昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅は間島省延吉野戦貨物廠付近の警備中、部隊長から伝達されて聞きましたが、誰も信じられず、「日本が負けるはずはない」と思って警備していた私どもの貨物廠も、八月二十三日、ソ連軍の戦車に包囲され、戦わずして武装解除され、延吉市内の日本軍兵舎に捕虜として収容されました。

この延吉収容所には朝鮮・ソ連・満州三国境付近で警備していた関東軍の将兵が多かったためか、不思議にも隣村で忍野村出身の天野九二三君（上等兵）や渡辺喜三兄さん（曹長）に収容所内ではったり出会ったのには驚きました。八月末頃、突然ソ連軍命令が出され「日本兵は東京ダモイ（帰る）だ、軍装で直ちに営門集合」という命令に、「それ、帰国できるぞ」と喜んで整列すると、百人単位の作業隊を編成、千人単位で延吉からソ満国境を通過してシベリア鉄道の沿線まで一週

間も昼夜も分かたず徒步行軍。シベリア鉄道沿線に着くと所かまわず家畜運搬用の有蓋貨車に乗せ、千人単位の軍団を組んで「日本ダモイ」と汽車が発車するが、汽車は北上し、昼は原始林の中で停車、夜中は走り続け約一週間も夜行軍、着いたところはシベリア中央のノボシビルスクと言う小さな田舎の街でありました。

二、ノボシビルスクでの捕虜生活

ノボシビルスクはアルタイ山脈の銅鉱掘り出しの鉱山の街で有名な銅山であり、ソ連では戦前盛んに掘り出したが一時中断、終戦と同時に、ドイツ人捕虜、日本人捕虜を人夫として酷使していた。宿舎は丸太積み重ねのログハウス。半地下式の大きな建物で、日本の木造兵舎の大きさ、二段ベッドの板敷寝台、真ん中が通路で入り口、出口にストーブ（石炭）があつて暖をとるが、冬は寒気が厳しく夜は寝られない寒さだった。一棟に一作業中隊（百人）が収容所されました。

この銅山は地下約三百メートルくらいの坑口で、トロツコ方式の鉄道運搬。私ども日本人は、ハッパで砕いた銅鉱石をトロツコに積み込んだり下ろしたりする仕事。それもソ連の民間人と一緒での仕事なので余りきつい仕事でもなく、ロシア人の温かい気持ちに助けられたり、また、日本人さんかわいそうだと、黒パンや煙草を恵んでくれたり、重労働の中でも助けられて感謝してきました。

仕事は十五人一組となり、毎日十組百五十人ずつの三交代、八時間労働でした。地下に入れば真冬でも一〇度くらいですから、地上の零下三〇度に比べれば大変楽なものです。地下には鉱塵が多く、胸の病気（塵肺患者）が多く出ました。それでも病人は休養室に入れてくれたり、重病人は病院へ入院も認められたので、収容所内は割合明るい生活ができました。

ただ困ったことに入浴もできず、下着の取りかえ、洗髪もできませんのでシラミが発生し、困っ

たものでした。給与については、一応捕虜規定で毎日黒パン三六〇グラムとか雑穀三〇〇グラムとか表示はありましたが、いつも定量の五〇パーセントくらいしか配給されないのが皆空腹で、夏になると野山の山菜（フキ、ヨモギ、アカザ、野ニラ等々）を岩塩で煮て食べたりしました。

三、「東京ダモイ」に涙流して

昭和二十二年八月二十日頃、私どもが作業場から帰ると突然収容所長命令で「お前たちはハラシヨラポータ（良く働く人）だから日本にダモイ（帰す）させることになった、喜べ」というお達しがあった。皆、万歳、万歳と喜んで夜も寝ないで語り合った。翌朝、ノボンビルスク駅にダモイの列車が入り、私ども作業隊はまた有蓋の家畜車に乗せられ、今度は昼夜も分かつず走り通し、約五日くらいでシベリア鉄道をナホトカ港まで到着。ナホトカ港では「日本共産党青年行動隊」という赤旗教育員から「天皇制打倒」だとか「民主

革命」だとか難しい講義を受け、学者になったような気分で迎えに来てくれた日本郵船の「高砂丸」に乗船。久しぶりに見た日本娘の看護婦さんや日本婦人会の皆さんの日の丸に迎えられ、九月八日朝、幾度か夢に見た日本の国、舞鶴港に上陸することができました。舞鶴では米国の占領軍から一応の取調べを受けたり消毒用のDDTを散布されたりして帰郷が許され、九月十日、懐かしい我が家、山中湖村へ生きて帰ることができました。

四、最後に、子供や国民に残したい言葉

生命の大切さをしみじみ知りました。これから安心して暮らせる日本、平和な世界を築くために次のことを守って下さい。

- 1 戦争は絶対にしないで下さい。
- 2 父や母を大切に下さい。
- 3 兄弟仲よく、家族だんらんの生活をしなさい。

4 みんな一生懸命働きなさい。

以上申し上げて、私のシベリア労苦記の報告といたします。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 岩沢 一男

一、出生から終戦まで

私は、山梨県都留市盛里曾雌で出生。町立旭高等小学校を卒業、家業を手伝っていましたが、昭和十九（一九四四）年十二月一日、現役兵として東部第六部隊（東京麻布）に入隊。大東亜戦補充要員として在北朝鮮古茂山衣第四三部隊第五中隊（歩兵）に転属、古茂山地方の警備に当たっていたところ、昭和二十年八月九日、ソ連軍がソ満国境を破って南下したとの報に接した。八月十五日正午の終戦の詔勅は部隊長から夕点呼のとき伝達されたが、誰も信ぜず、日本軍は神の軍隊で負け

ることはない、デマだと言っていたが、それでも戦争が終わればみんな生きて帰れるぞと一面、安心したものでした。

昭和二十年八月二十三日、部隊は興南に集結、兵器を興南女学校に収めて武装解除され、そこに收容されて捕虜となりました。

八月末頃、私どもの部隊を主力に千人くらいの梯団が編成され「東京へ帰るのだ、早く早く」とせき立てられ、喜び勇んで興南港から大きな貨物船に乗せられました。船は日本海に出て六日間もかかってウラジオストック港に入港。夜中ににわかの上陸。「約束が違うぞ」と兵が言う、ソ連将校が拳銃一発を空に向けて発砲、それで終わり。黙って歩くこと五十キロメートル、原始林を通り石炭掘削の町、アルチョムに連行されました。

二、アルチョム第二收容所での労苦生活

アルチョムは露天掘りで有名な良質石炭の採取